

# MODE MASTER SCHOOL

## パチスロの歴史

～回胴式遊技機という名のパチスロ機～

**Mode IN**  
株式会社メイドインサービス

# ○パチスロの歴史

## □パチスロの起源

スロットマシンは、1905年サンフランシスコで発明されたと言われている。発明者はドイツのバイエルンからアメリカへの移民であるチャールズフレイという男性。最初のモデルは「自由の鐘」と名づけられ、リノの「自由の鐘」サロンというところに今でも飾られているそう。

日本ではまず、アメリカ軍基地内で娯楽用に稼働していたスロットマシンが沖縄に持ち込まれ、ギャンブル機（景品と交換可能）として稼働していた。

進駐軍払い下げのスロットマシンは警察庁から「賭博機」と見なされ、公式な営業許可は出されていなかった。初めて営業許可を受けたのはセガの『**オリンピア・スター**』である。東京オリンピックの1964年（昭和39年）に登場したことからこの名が与えられた。

警察庁が旧来のマシンを「賭博機」と見なしたのは「**技術介入の余地が乏しい**」から。

このため、『オリンピア』には技術介入の要素が取り入れられたのである。

この頃のマシンは、目押しで絵柄を揃えることが可能だった。ただ今と違い、リール回転が異常に早くて、普通の人にはとても目押しできるレベルではなかったらしい。

## □3メダル5ラインの登場

『オリンピア』は、1ゲームの料金はトークンは1枚でペイラインは1つ、ボーナスゲームが当たっても、獲得できるトークンは最高でも僅か85枚（しかも初期型にはこのフィーチャーが無かった）でしたが、この新製品は、1ゲームにトークン3枚がベットでき、ペイラインも5つに増えていた。また、ボーナスゲームも、一旦そのモードに入ったら打ち止めまで一直線というものだったそう。

1977年（昭和52年）、**マックス商事（現・バルテック）の『ジェミニ』**が、現在の基本仕様である「**3メダル5ライン式マシン**」の元祖として登場した。法律上、言及されていなかったパチスロの時代は、1号機以前の機種として、便宜上0号機と呼ばれた。

1985年（昭和60年）に施行された新風営法の中で、初めてパチスロが「**回胴式遊技機**」として言及された。この規定に基づいて作られたのが「1号機」である。

# ○パチスロの歴史

## □0号機時代（～1985）

- ・ボーナス決定方式・・・**吸い込み方式**
- ・ボーナスゲーム・・・「大当たり役」のことで12回のJACゲームができ、店が設定した打ち止め枚数まで次回のボーナスゲームが高確率で当たる仕様だった。

1985年の「**新風俗営業法**」以前の機種を指して便宜上「**0号機**」という。

パチスロを管理する基準など無かった時代なので、極端にスベリの有るものや、反対にスベリの少ないもの、目押しすれば狙った絵柄を揃えられるという目押しの出来るプレイヤーにとっては攻略の対象になった。

役は、ボーナスゲームと小役ゲームのみで構成され、一度ボーナスゲームが当たると次回のボーナスゲームが高確率で当たり、店が設定した打ち止めまで続くようになっていた。また、連チャンの規制も無かったので激荒の波を持った機種もあり、リバティーベルでは50連チャンの話も有ったほど。

尚、パチスロパルサーには山佐パターンと呼ばれる独特の**リーチ目**があって、リーチ目表（大量リーチ目タイプなので代表的なパターンのみ）がホールに張り出されていた。このパターンは現在まで続いていて、パルサーシリーズのウリになっている。

なお、当時は今のように無制限で交換率が5枚～7枚交換などというものではなく、ボーナス1回ごとに交換し交換率も**10枚交換**というホールがほとんどだった。またリプレイの存在もなかった。コインサンドもまだなく、**コインを50枚単位で紙で包んであるもの**をカウンターで1000円で交換していた。今でも年配の方が1000円を1本と呼ぶことがあるのはこのときの名残である。都道府県ごとに規制が異なったため、0号機では、同一機種でも隣の県では異なるゲーム内容となっていた。メーカーは現在のパチスロシーンのメンバーがほとんどで、オリンピア・ユニバーサル販売・高砂電器・サミー・北電子・バルテックなどが機種を発表している。

※代表機種 パチスロパルサー、リバティーベル



紙巻コインイメージ

# ○パチスロの歴史

## □吸い込み方式とは？

台に入れた枚数が一定枚数を投入すると当たる、というもので、具体的には…

**ボーナスが当る ⇒ 吸い込み枚数が決まる ⇒ 規定枚数が投入  
される ⇒ ボーナスが当る ⇒ 吸い込み枚数が決まる ⇒ …**

これを繰り返す仕様。

吸い込み方式というのは、簡単に言えばこのような仕組みの事。

この「吸い込み枚数が決まる」時点で、少ない枚数が選ばれやすいのが高設定、そうでないのが低設定、というような推測のしかたが主流だった。

1988年に吸い込み方式が廃止され、現在のように毎ゲームボーナスを抽選する**完全確率方式**になった2号機になっても、設定の概念は変わらずに存在する。

これは高設定はボーナス確率が高く、低設定はボーナス確率が低いというもので、今の今まで変わらずに現在に至っている。



山佐「パチスロパルサー」



日本初の許可パチスロ機  
マックスアライド「ジェミニ」  
アップライト型と呼ばれた

# ○パチスロの歴史

## □1号機時代（1985～1988）

- ・現在と同等のボーナスシステム搭載（**ビッグボーナス、レギュラーボーナス**）
- ・ボーナス決定方式・・・大多数が吸い込み方式
- ・ビッグボーナスの枚数・・・純増370枚
- ・販売は1メーカー1機種と規制される

**1985年の「新風俗営業法」**以降に販売された新風営法に基づいた全国統一認定基準に適合する機種を指す。パチスロは「**回胴式遊技機**」と表現されるようになる。

1号機は、改造基盤を取り付け、「連荘」や「前兆」などのパターンを豊富に持つ機種が登場し、プレイヤーの攻略心に火を付けた。しかし、改造基盤が溢れ過度の連荘を引き起こし、射幸心を必要以上にあおってしまったため、改造防止対策として1987年に1.5号機へと変化した。1.5号機は「**日本電動式遊技機工業協同組合**」（日電協）のROMを統一し、基盤を封印する事で不正に対抗するというものだった。ゲーム性は、投入枚数によってボーナスを成立させる「吸い込み方式」をとっているものが多かった。Aタイプのみ存在し、純増方式のみで約360枚で打ち止めとなる。ボーナス終了時に打ち止めとなるのは0号機時代の名残である。

【代表機種】 ファイヤーバード7、プラネット



山佐「プラネット」



瑞穂製作所「ファイヤーバード」

# ○パチスロの歴史

## □2号機時代（1988～1990）

- ・コインを50枚まで貯留できる**クレジット機能**が採用される
- ・ビッグボーナスの枚数・・・純増370枚から純増350枚になる
- ・1ゲーム間**4秒以上のウェイト**を義務化する
- ・ボーナスは吸い込みでなく、**完全確率方式**になる
- ・**シングルボーナス、集中役**が登場した
- ・販売は1メーカー2機種と規制される

2号機が現在のパチスロの基本を作ったといっても過言ではない。2号機から集中役というものが登場し、フルーツやSINの集中で一撃数1000枚overも得られる事から大人気となった。

4号機でも大ヒットした「アラジンA」(サミー)のアラジンチャンスは2号機の「アラジン」に搭載されていたものである。高いギャンブル性を持っていたことから、短い期間ですぐに3号機へと移行していくことになる。

【代表機種】 アラジン、センチュリー、アニマル、バニーガール



ニイガタ電子精機「アラジン」



オリンピア「バニーガール」

# ○パチスロの歴史

## □3号機時代（1990～1992）

- ・小役集中が大幅規制される
- ・販売は1メーカー3機種の自主規制となる
- ・**ウェイト時間は4.1秒**と明確になる

1990年、2号機の規則に修正が加えられた。ここからが3号機の時代となる。

2号機のギャンブル性を抑えた仕様であり、人気のあった集中役に対する規制が強化されたためゲーム性が画一化されてしまい面白みが大幅に削減され、結果的に連チャンを誘発する仕掛けなど違法な**裏モノ**が多く出回るようになった。

こういった流れへの対処として大規模な基板改修や再封印が行われた結果、パチスロの人气が急落した。また検定取り消しになった機種もあったが法的な拘束はなく、4号機から5号機への移行のように即時に撤去されることはなかった。

【代表機種】      コンチネンタル、ワイルドキャッツ、リノ、スーパープラネット



瑞穂製作所「コンチネンタル」



ニイガタ電子精機「リノ」

# ○パチスロの歴史

## □4号機時代（1992～2006）①

- ・販売についてはメーカー側の自主規制撤廃となる
- ・JACゲームを6回から8回に
- ・**リプレイの登場**
- ・フラグ表示機能の搭載許可
- ・BB/RB以外のフラグ持ち越しの禁止
- ・期待値方式の採用
- ・4thリールや**液晶搭載機の登場**
- ・**CT(チャレンジタイム)搭載機登場**
- ・**RT(リプレイタイム)搭載機登場**
- ・**AT(アシストタイム)搭載機登場**
- ・**ストック機登場**

「小役回収打法」「**リプレイはずし**」など、打ち手の技術介入度が高い機種が続々登場。「目押し全盛時代」と言われるパチスロ全盛期。その後、1998年に登場のCT機がブームに。

同じく1998年に大量獲得機、マルチライン機も登場。1999年には4thリールや液晶を搭載する機種が登場し筐体そのものが大きな進化を遂げた。4thリール搭載の大花火が大ヒット。若者を中心にパチスロ市場の急速な拡大を見せた時代に突入していく。



アルゼ「サンダーV」



アルゼ「大花火」



# ○パチスロの歴史

## □4.0号機時代（1992～2007）②

そして2000年、いよいよ4号機史上最大の問題を投げかけることとなる**AT機とストック機**の登場でパチスロシーンは一変する。

完全確率をベースとした規制であるが、規定の拡大解釈により、大幅な変貌を遂げたAT機がブームとなり、射幸心を大きく扇ぐ形に発展した。

最初はスーパーBIGなどの名目でBB中の小役ゲーム中に3種類の15枚役を高確率で成立させ、ナビによって大量獲得させるなどという方法をよく使っていた。これを通常時に採用し、12択という奇抜なアイデアで登場したのが**サミー「獣王」**である。保通協ではボーナス以外の出玉でここまでの破壊力を作れるとは想定しておらず、検定試験でも、このような目押しを考慮にいたした出玉は想定外だった。獣王から始まった爆裂ATブームは衰えを見せず、むしろ獣王を凌ぐほどの爆裂性を持ったマシンが続々と登場した。

「コンチ4X」「爆釣」「ゴルゴ13」「サラリーマン金太郎」「神輿」「アラジンA」など特にアラジンAでは、7万枚オーバー（等価交換で140万円）を記録するなど、その勢いは今でも語り継がれるほど。

また、2001年に登場したネット「ブラックジャック777」が業界初となるストック機能を搭載したパチスロ機として登場し、瞬く間にストックブームを巻き起こすことになる。



# ○パチスロの歴史

## □4.1号機時代（2000～2003）②

4号機の射幸性が限界まで達し、多数の破産者が続出する状況の中で警察の動きを察知したと思われるが、2002年7月に日電協が自主規制を発表する。

これは、既存の4号機の各マシンの射幸性の大きさを区分分けすると共に、それ以降は射幸性を抑えたマシンを開発する、というもの。

この時に区分されたのは、以下の3つ。

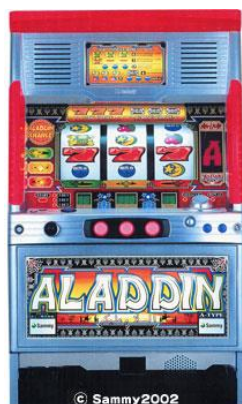
- 1) 「自主規制仕様と同等の機能を有する遊技機」
- 2) 「適度な射幸性を超えるおそれがあると認められる遊技機」
- 3) 「著しく射幸性が高いと認められる遊技機」

1) は、これから作ろうとするマシンと同じ感じで問題の無いマシン。

2) と3) がいわゆる「4.1号機」と呼ばれるもので、特に後者が「問題マシン」のレッテルを貼られたものである。つまり「4.1号機」は、それに向かって開発されたものでなく、後付けでそう呼ばれるようになった号機ということになる。

3) は、発売済み機種で「コンチ4X/4XZ/4XZ-30」、「爆釣」、「一撃」、「アラジンA」の4機種が選ばれた。

1) の自主規制は、あくまでも「新規開発」に関するものであり、既に市場に出てしまった爆裂マシンは野放し状態だった。しかし、2003年（平成15年）10月、突如、警察が動き出し、「ミリオンゴッド」、「アラジンA」、「サラリーマン金太郎」が検定取り消しとなった。



# ○パチスロの歴史

## □4.5号機時代（2002～2004）②

射幸心を抑えるために日電協は2002年7月自主規制を改定。これ以降に審査を通過した機種を4.5号機と呼称することとした。

ここから「自主規制仕様」に基づいたマシンが開発されたが、この自主規制の内容は簡単に言うと、4号機中期の規制緩和、「今までは取りこぼした小役の分を機械割に反映させていたが、それを反映させなくてもよい」をやめて元に戻す、というものだった。これにより、メーカー発表機械割：120% ⇒ 実質機械割：140%と言うようなスペックは規制され、正確な目押しと押し順を実施し、ちゃんとATをこなした上で120%に収めることがマシン開発の基本指針となった。

これは、あくまでも「業界側の自主規制」であり、規定や型式試験方法が変わっているわけではない。2003年10月に販売され62万台もの販売実績を記録し、ギネスにも載って話題になった「北斗の拳」もこの4.5号機基準で開発されたパチスロである。その後、711枚の1G連荘を搭載した「吉宗」も同基準で開発され、当時は「北斗の拳」に次ぐ、26万台と言う設置があった。初めて「4.5号機」として世に出たのは、ネットの「モグモグ風林火山」である。

【代表機種】モグモグ風林火山、アントニオ猪木と言う名のパチスロ機、旋風の用心棒、

**吉宗**、スーパーブラックジャック、**北斗の拳**、南国育ち



# ○パチスロの歴史

## □4.7号機時代（2003～2007）②

射幸心を抑えるために導入された4.5号機であったが、それでも十分ではないとメーカー内でも判断され、2004年1月さらに規制を強化し、「終日で万枚オーバーしないように設計する」という趣旨の規制をベースに、以降に審査を通過した機種を4.7号機と呼称することとした。

しかし、日電協の自主規制区分上に「4.7号機」というものは存在しない。あくまでも、開発指針の号令をかけただけで、正確には「2003年10月以降の4.5号機」ということになる。

総じて4.5号機より出玉性能が抑えられているが、短期的な爆発力は登場当初の5号機と比べれば依然勝っていたため客のニーズは高く、多くの機種が検定期間満了まで設置された（全ての4号機が撤去されたのは2007年9月30日である）。

2004年6月で4号機の試験申請の受付が終了するため、特に5～6月の駆け込みでの検査申請マシンは「不適合＝お蔵入り」が確定してしまうことにより、さらに低機械割への傾向に拍車をかけることになった。

【代表機種】カイジ、主役は銭形、鬼武者3、鬼浜爆走愚連隊、**押忍!番長**、俺の空、**秘宝伝**、  
北斗の拳SE



# ○パチスロの歴史

## □5.0号機時代（2005.10～）

- ・ **ストック機能の搭載禁止**
- ・ **ボーナスを総払い出し枚数規制**（最大480枚、CT搭載機種は360枚）
- ・ リールのスベリ禁止
- ・ リール上の液晶などの表示禁止
- ・ CTは引き続き搭載可能

2004年7月1日～施行された新規則に基づいた検定を通過した機種の中で、初の5号機として登場したのが2005年10月登場のビスティ「新世紀エヴァンゲリオン」だった。

※厳密には5号機規格での初登場は、2005年6月導入のSANKYO「CRP花月伝説R」（パロット：パチンコ玉で遊ぶスロット）になる。

射幸心を煽りすぎた4号機と比較して出玉性能が大幅に制限される反面、技術介入面での差はさほどなくなり、打ち手に平等になった。しかし、リブパンはずしによる大きな技術介入要素が搭載されている機種もある。

また、4号機後期のようなボーナスのストック機能が認められなくなり、いわゆるゲーム数天井で強制ボーナス放出はできなくなった。このため、前回ボーナスから一定ゲーム数を経過するとリプレイタイムやアシストタイムが発動する、「天井RT」「天井AT」によってハマリ救済を行う機種も現れた。

このように、短時間の差枚数や連チャンなど、出玉の面でのアピールの弱さが課題であったため、これをカバーする目的などから液晶画面を搭載している機種が主流となり、アニメなどとのタイアップ機やいわゆる**萌えスロ**も多く発売された時代でもある。

その他の特徴として、4号機時代に登場した人気機種のシリーズの登場がある。継続的に販売が出来るようにシリーズ化して長く設置してもらおうのが目的である。

【代表機種】バジリスク絆、エヴァンゲリオンシリーズ、北斗の拳シリーズ、緑ドン、  
ミリオンゴッドシリーズ、アイムジャグラーシリーズ、交響詩篇エウレカセブン

# ○パチスロの歴史

## □5.5号機時代（2015.12～）

- ・ **通常遊技中の最低シミュレーション出玉率が1未満**  
(通常時は押し順ナビに従うだけで出玉率が100%を超えないようすること)
- ・ **傾斜値（純増枚数）が2.0枚未満**
- ・ **指示機能（押し順ナビなどの管理機能）の管理基板をサブ基板からメイン基板に移行**

2014年9月16日に警察庁からの指摘により、型式試験の見直しが行われ、最も出玉率が低くなる打ち方をしても、出玉率の下限55%を維持できるような試験方式へ変更された。

これまでのAT機は、通常時はリプレイしか揃わず、AT状態の押し順ナビに従うことにより出玉率の下限をクリアしていたが、これを無視して順押しのみを行うと出玉率が著しく低くなってしまったため、これまでのようなAT機が発売できなくなった。

これにより、AT機は消滅するかと思われたが、順押しでもベル等の小役が揃い、千円当たりの遊技回数が40～50回転と従来のAT機に比べ高ベースになるものの、初当たりが重くなるという新基準AT機が開発された。

新基準AT機の登場により、射幸心抑制を狙った型式試験の変更が意味を成さなくなってしまった。これを問題視した警察庁からの更なる指摘に応じ、組合間で合意した自主規制案が警察庁に了承され、2015年7月15日に公開された。この規制の主な内容としては、上記の通り。

他にも、これまでのAT機で一般的に行われていた擬似遊技（フリーズ状態でリールを回転、ボタンで止めさせて、あたかもボーナス図柄やレア小役を揃わせたかのように見せかける行為）も禁止されることになった。

これによって、新基準AT機も型式試験をパスすることが不可能になった。この自主規制は2015年12月以降の型式試験に適用されており、検定通過機種は「5.5号機」と呼ばれることとなった。また、自主規制前に検定をパスした機種の新台設置を2016年7月30日までとした。

【代表機種】 聖闘士星矢 海皇覚醒、押忍!番長3、GI 優駿倶楽部、バジリスクⅢなど

# ○パチスロの歴史

## □5.9号機時代（2017.10～）①

- ・「有利区間」と「通常区間」の概念の導入
- ・「有利区間」の滞在比率は全体の70%まで
- ・「通常区間」から「有利区間」の移行率には設定差は設けてはいけない
- ・「役比モニタ」の導入（有利区間やボーナス等の比率を主基板に表示し、不正を防止するもの）

これまでパチスロでは存在しなかった「有利区間」という概念が加えられたのが5.9号機であり、出玉性能において、大きな影響を及ぼす機能でもあった。

有利区間の滞在は、最大1500G目つ純増最大2.0枚となり、一撃で獲得できる出玉は最大3000枚となっている。さらに有利区間が終了した次ゲームには原則として内部的に初期化されることが義務付けられているため、連続した一撃性の高い機種の開発が難しい状況である。さらに有利区間以外はART等の抽選が出来ないうえ、有利区間中は筐体の分かりやすい部分へランプ等で滞在を知らせる機能を付けなければならないため、通常区間はARTの抽選をしていないと言う事が打ち手側にも分かってしまう。これら条件からも通常時の期待感を煽ることが難しく、短期間で稼働低下の要因ともなっている。さらに有利区間への移行率・抽選確率に設定差を設けてはいけないと言う事で、ユーザーにとっては全く期待感の持てないパチスロ機として、高稼働実績を出せる要素が少ない仕様である。但し、有利区間を必要としないRTタイプの機種では、コードギアスC.C.verなど、実績を残した機種も少なからず登場してきている。

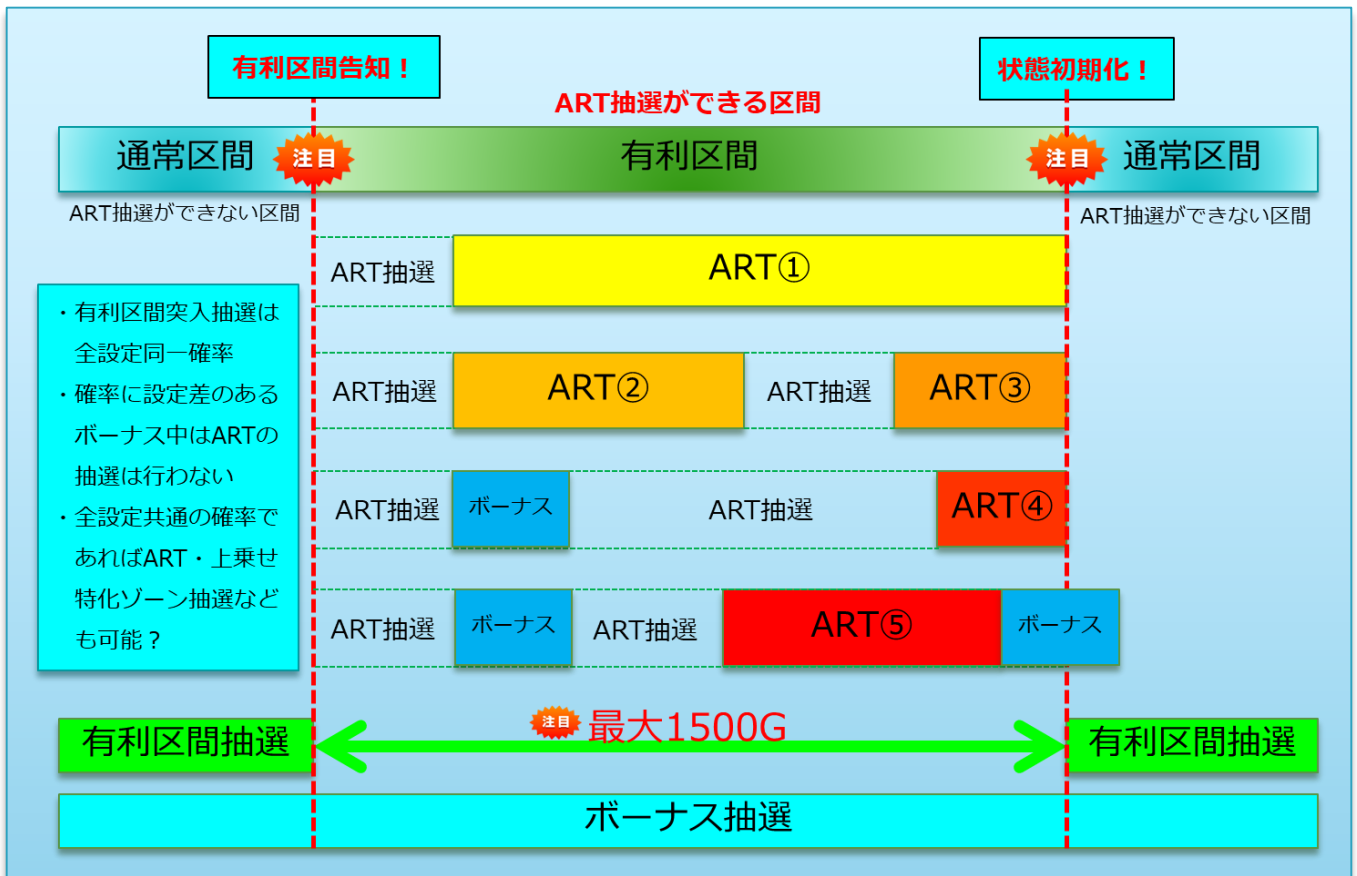
またノーマルタイプにおいては、役比モニタ以外5.9号機の仕様で影響を受ける者もなく、これまでの5号機とほぼ変わらないため、稼働も出玉性能も同等の推移をしているが、ARTタイプの実績が出ていない分、ノーマルタイプの比率が上昇する傾向が強まっている。

5.9号機の設置期限は、原則として2021年1月末までとされており、認定申請もできないため、みなし機になる瞬間から撤去対象となる。2018年現在では、みなし機の撤去に応じない場合は、即取り締まりの対象となる。

## ○パチスロの歴史

### □5.9号機時代 (2017.10~) ②

#### 5.9号機 区間概要図 ※MIS調べ



【代表機種】 戦国コレクション3、ブラックラグーン3、コードギアス反逆のルルーシュ R2C.C.ver.





# ○パチスロの歴史

## □6号機時代 (2018~???)

- ・有利区間は**最大1500G**、又は**最大MY2400枚**で終了
- ・ボーナス払い出し枚数 **最大300枚 (1種BB) ・ 240枚 (2種混合BB) ・ 168枚 (2種BB)**
- ・**純増2.0枚の制限撤廃**
- ・**出玉試験の変更**

試験期間	出玉率	旧規則 (5号機)
400G	33.3% ~ 220%未満	~ <b>300%未満</b>
<b>1600G</b>	<b>40.0% ~ 150.0%未満 (新設)</b>	<b>なし</b>
6000G	50.0% ~ 126.0%未満	~ <b>150%</b>
17500G	60.0% ~ <b>115.0%未満</b>	55%~ <b>120%</b>

2004年に改正・施行された、射幸性を抑えるための風営法に沿って、5号機の営業を続けてきた業界ではあったものの、メーカーの開発努力や拡大解釈によって、一撃万枚~2万枚と言う大きな出玉を獲得できる機種が徐々に増えていった。この事態を重く受け止めた行政側からも、高射幸性遊技機についての言及や指導が強まっていった。

行政側も更なる射幸性の抑制を実現するために、5号機登場から10年以上経って風営法の改正に踏み切った。これまで業界側の自主規制と言う形で5.5号機、5.9号機と言ったより厳しい規制の中で機械開発を実施してきたが、より射幸性を抑えるため更に規制を強化された規則で開発され機械が6号機である。

特に影響を受けたのがジャグラーシリーズを中心としたノーマルタイプであり、1回のボーナスで獲得できるメダル数が大きく減少した。これにより、リアルボーナスにATやARTを付加して、獲得枚数を増やすタイプの機種や疑似ボーナス (ATやART) が増えてくると思われる。

また、純増2.0枚制限の撤廃により、5.0号機のような高純増AT機などの開発も可能になり、より幅広いゲーム性を持った新台が登場する可能性が広がった。

※2018年秋ごろ~年末にかけて、初期の6号機が登場すると予想されている。